南梁年録 八十

共八

和書門
類
三五九八四號
一七一函
一架
八冊

内閣文庫
和書
類
三五九八四號
一五一函
四架
八冊

内閣文庫
番號 和 35984
冊數 8（5）
函號 151 21

文久四年甲子 八月至九月

南梁年録 八十

因部壮之介来書 八月廿日 京師ゟ

去月十九日より之一件は先大略並び十八日夜半頃より
山崎伏見天龍寺三手ゟ長勢五百人程押寄烏丸
通り築地を破り蛤御門因州會勢と砲戦之處其以前
中川宮様ハ御退出宮様ハ御所ニ参内宮中ニ参りホ
右戦始り候ニ付新在家町会戦敵味方共討死手負程
長勢潰走之處夫ゟ中立売堺町之戦ニ及其外烏
丸一條ホ合戦数處有之長人町家へ逃込或ハ公家抗
屋敷へ逃込候ニ付同之鷹司殿へ火矢を射烏丸通
中立売長者町ハ薩會ゟ大矢ニ掛り射一時焼失

加之廿日夜浪士八横ニハ合戦之節中第一之御備内
通天城御固私共御陣ニ付御出陣御座之
御儀御座候へハ
主上御興ニ而参内大名之内為方満足御様躰ニ而是
又万石以上之御座候而一君會津並小田原共大名小名ニ
至迄皆事奉既ニ遷幸之御内御位相廻ニ相成候而出
御門ニ群集形之人数御座候ハ何レも甲冑ニ而之者御
家来ハ武具之類之何レも野陣ニ而大ニ相揃之事
中ニも大名山崎伏見天龍寺ハ會津押寄砲発之
敵勢更ニ不見候事伏見ニ而御門外ニ而伏見之者ハ十九日之戦ニ

之長州計凡ソ四百人程也其外ニ而京都之諸藩三百
人程も有之由其上野宮益田右衛門介福原越後國
司信濃根村右衛門佐久間大五郎等都合十人程之内
右之通京都之有之意ニ上ハ主上泥難ニ迄御覧之時
別段之通り右名之人命ニ御座候事ニ其中ニ而取扱
此度之類ニ而取り中ニ其後様子之了承ニ而已之事見
角在情不穏ニ相成候六月中御守衛之儀之出処長
藩押寄天龍寺ニ屯集之者共人数ニ至ルニ付ニ而
相届之御付共之渡方相成候ニ付　以下略
町数凡ソ八百十町　村　下村

家数　弐万五千九百廿四軒　内寺社方十八軒
曇華院宮御里坊　一軒　本願寺御門跡
佛光寺御門跡　武家屋敷　四千四ヶ所
堂上方家来　弐百七十六軒　武家方家来　七十軒
興正寺家来　廿九軒　御所御役人　七十七軒
本願寺家来　百六十七軒　佛光寺家来　八軒
社　五十四ヶ所　御殿　弐ヶ所
御作地　七ヶ所　大佛師　壱軒
境内借家　百五十七軒　寺院　七ヶ所
土蔵　千弐百十六ヶ所　地蔵堂　四百六十一ヶ所

明家　四百弐軒　町御入用　弐百五十七ヶ所
穢多居　百廿四ヶ所　番部屋　五百六十弐ヶ所
橋　四百八十ヶ所　辻番小屋　一ヶ所
番所　七ヶ所　芝居小屋　弐ヶ所
非人小屋　三ヶ所　穢多村　三ヶ村
小屋数　四百四十四軒

八月十三日

有馬遠江守　脇坂淡路守
松平壱岐守　松平佐渡守
松平主計頭　板倉摂津守

松平大膳大夫追付ニ被仰付候所此度者常陸之土
取ニ成候様可被成候

（板倉）松平周防守

松平大膳大夫追付ニ被仰出候ニ付其方儀淡路蜂須賀
阿波守陣ニ被仰付同岩國城今度落去大谷山口江
向大膳大夫父子誅戮可有之ニ付右ニ付松平安芸守
吉田信濃守阿部主計頭江被仰付候ニ付可被成候
合ニ

右同人

松平大膳大夫追付ニ被仰付候 松平近江守三浦備後
守板倉摂津守本多肥後守其方共ニ援兵ニ被仰付
間其用意可致候、是又其方共ニ陣入ニ付可致割合
方之儀ハ可致之通ニ被仰出候事可被成候ニ付其月
中出張ニ付早々出勢可有之出張候ハ
尾張前大納言殿へ可被相伺ニ

一 淡路蜂須賀分岩国大谷山口へ援兵ニ而も

松平安芸守　板倉周防守

真田信濃守　阿部主計頭

蜂須賀之援兵之面ニ

一 松平近江守

一 本多主膳正

壹番
三浦備後守
板倉摂津守
本多肥後守

弐番
松平備前守
脇坂淡路守

陸路石州ゟ萩夫ゟ山口へ陸寄り面々

壱番
松平相模守
松平右近将監
亀井隠岐守

弐番
松平三河守
松平出羽守

三河守始備後ニ面々
有馬遠江守
松平主計頭
松平佐渡守

海路四國ゟ徳山夫ゟ山口へ陸寄り面々

三番
松平阿波守
松平隠岐守

四番
松平讃岐守
伊達遠江守

讃岐守始備後
松平壹岐守

海路下ノ関夫ゟ山口へ陸寄り面々
細川越中守
小笠原大膳大夫

壱番
奥平大膳大夫
小笠原幸松丸
小笠原近江守

小笠原大膳大夫殿ハ領分近キ故ニ付細川越中守與

平大膳大夫ニも右之通ニ付向近江守并松丸も大膳大夫
之ニ而も相残り申候

松平美濃守
小笠原佐渡守

海路萩ゟ山口へ相越候面々

松平肥前守

修理大夫応援

松平主殿頭

松平修理大夫

有馬中務大輔
立花飛騨守

右之通往来筋中之儀ハ万石以上尾張前大納言

取付指揮ニ随て速ニ遂成功候様可心得也

一 陸路藝州ゟ石州口夫ゟ山口へ相越候面々

松平右近将監

白井右門

陸路石州ゟ萩夫ゟ山口へ相越候面々

小笠原修理

内藤備前守

大島主殿

朝倉小源太

海路四国ゟ徳山夫ゟ山口へ相越候面々

水野采女

服部伸

遠山左衛門

海路下ノ関ゟ山口へ御着面々

〃 多賀[illegible] 〃 曲淵清一郎

〃 岩淵敬太郎

海路萩ゟ山口へ御着面々

〃 天野民十郎 〃 平岩金右衛門

〃 内藤平十郎

右之通ニ軍目付ト被差遣可申旨達之

八月十四日

[illegible]
〃道中奉行
松平對馬守

講武所奉行
遠藤但馬守

大番頭
大久保長門守

御書院番頭
一色摂津守

〃
松平駿河守

御小姓組番頭
島津伊豫守

〃
松平造三郎

〃
神保伯耆守

歩兵奉行
講武所奉行並兼帯
黒川近江守

〃槍奉行
伊奈熊蔵

〃[illegible]奉行
岡松伊豫守

〃
竹中民部

〃
本多日向守

〃
太田筑前守

〃
[illegible]

陸軍奉行
川勝丹波守

大目付
土井出羽守

御勘定奉行
有馬出雲守

〃
松平民部少輔

御目付
山口信濃守

騎兵頭 長井筑後守
〃 富永雄之助
〃 鈴木大之進
新番頭 須田久左衛門
〃 勝田左京
〃歩兵頭並 松平信之丞
歩兵頭並 松平謙三郎
〃 中平洗辞一郎
〃 土方八十郎
〃 上野新三郎

歩兵頭 本郷丹後守
〃撒兵頭 江原桂助
西丸御留守居並 林民部少輔
〃 新庄美作守
〃 大久保権右衛門
〃 高力直三郎
大目付並 下曽根次郎助
御先手 三枝左京
〃 永野清之
〃 藤沢讃岐守

〃 中坊陽之助
〃 加藤織之助
〃 内藤若狭守
〃 戸田
〃使番 落合鉄道
〃 永井真之丞
〃 牧助右衛門
〃 松野一郎兵衛
〃 松平主計
〃 増田健次郎

〃 本間淳正
〃目付 石野民部
〃 小笠原刑部
〃 伊奈兵庫
〃 井戸大内記
〃 三好内蔵之助
〃 仙石弥兵衛
〃 夏目次郎左衛門
〃 永見貞之丞
〃 永井大之進

〃 岡部主税
〃本多日向守与力 神保孝[illegible]郎
〃太田備中守与力 伊東貞四郎
〃安藤対馬守与力 神吉左衛門
〃松平越中守与力 笠原愛之進
〃 井上左太夫
〃 中島平四郎
〃 渡辺為三郎
〃 本多年之助
〃 久保勘次郎

内藤紀伊守与力 窪田勘太郎
〃松平[illegible]守与力 田村金右衛門
〃小笠原佐渡守与力 永井右京
〃牧野備前守与力 萩原金之進
内藤紀伊方 田村四郎兵衛
〃後詰 中條金之助
〃 仙石播磨守
〃 興津喜右衛門
小十人頭 本目長門守
〃 金沢[illegible]郎

〃 森山次郎八
〃[illegible] 安永仁左衛門
〃[illegible] 小俣稲太郎
〃[illegible] 諏訪部謙三郎
〃[illegible] 曲木仙之助
〃[illegible] 柴田小十郎

内藤紀伊方 [illegible]将監
〃[illegible]頭 [illegible]
〃勘定吟味役 池野山城守
〃[illegible]頭 力石勝之助
〃[illegible]頭 戸田綱次郎

松平大膳大夫殿ニハ征伐之儀ニ付御受之儀ハ彼是仕
右於芸州同豊後守ト談し立花出雲守附之
豊後守ゟ来ル十九日迄ニ御受之儀ハ軍
艦操練ニ付[illegible]相伺有之[illegible]候

まつり

八月

大月廿八

松平大膳大夫家来書也　禁闕狼藉以除不恐

天朝以御猜之父子官位除之家来へ者蛤御門之

不届至而父子共京師　以御所ニ御発向

候得ハ　征伐可被仰出之儀被仰出候事

八月

元治元年子八月京師騒動之儀ニ付

一橋様ゟハ毎度御使者様へ御書之写

朝夕冷気相成候得共益御安泰被為在恐悦至

極ニ存候然ハ当地之形勢追々御承知有之ニ而宜

入御聴候共毛利之儀被遊候義ハ宗家之中近ニ付迄ハ

可為致旨被仰出候処所々ニ而毛利家老福原

越後共平日之六月廿三日大膳大夫ハ京都へ於歎願之

御沙汰有之候所其後大膳見ハ乍人数伏見泊候々

右越後ハ伏原越出ニ而者并天龍寺山崎ニ進ミ集中

二年越後ハ中出勤ニハ有之而者書 [illegible] 此出ニ付之候出候

猶申所私ヲ以昨秋御是ハ帯刀仕ニ上ル要来く
私共ニ於テ私共ニ於テ集リ以来有之
朝廷幕府ハ孰共指出しを為し漫然以テ入
京被召も被下候事ニ今年格別之を以方面ニ
至リ越後ハ敵ハ可同国同様之事ハ有何卒
関東之兵ヲ帰シ至尽当今以下御志縁ニ付
出候故陸復シ国事ニ於テ被出候者追々多人数ニ
在中兵ニ御陣仕リ於越後ハ陸之可令以ニ
有年来之兵ニ而已有之候新潟主ニ至リ可有
る金ニ而之地方探索仕候而全く会津を以隔さ

昨年八月已来ニ復シ夜之為何度共守以来既ニ成
シテ征討も無之夫ニ而浮浪ニ而二月十七日豊後
成ニ白旗押立越後入京ニ而来以来私初此国ニ而ニ
背ニ兵国仕候ニ而私越後ハ可有陸下越有ニ私越
以抱ル也人而可承ル之以テ加之敵諸候ハ何而申候一
御出兵ニ而ハ有之ニ以抱ル有之以而何而之入京
候ハ有之而持主張候ニ兵器を携之大砲を持入京
以而対朝廷而以此之事ハ可有之為ニ来達ニ
計テ下向会津姉ヶ合候ニ二月廿八日ニ而至ニ
有之而探ヶ修而候而以而有之征伐ニ而ある

関之浮沈決此節ニ御座候、然者先ハ彼心底ニ相叶
大切備ヘ之事候得共、左様ニ有之候て我意ニ及候ハヽ今ヨリ
と不存候、去ル寛永ニ至り三百年の太平ニ今ニ至り候か
乱世と成候て申已、右ハ将軍の下ニ於ても無謂者ヲ殊ニ
此事恐ニ候得共一度延期候得者御手ニ不及候
ミハ沙汰ニ可及と申候、又々候ニも無之、此ニ付将軍之御
威ニ於朝廷ヨリ此之儀を被命、右ニ付衆之者古今不審ニ候
思召候ニ付、其許ヨリ掛物ニ而も段々経（歎）歴シ候ても有之
此城後并井伊殿御跡之御当家ニ付仕而
猶々候得、幕府ハ大小ハ月日ニ而御城後生而

中間ニ而彦根越後ハ其表文ニ相成事何分可申
之儀此之候段何ヶ度も事之段々無之以て書面之
候得ハ不申上候事中出て之御事筋之集
朝廷幕府ハ夜建白以て右段聞之様候間猶被成
探候處同様ニ候所殿ヨリ文以て候得猶猶
御座候方可然事候段幕府ニ而も御承知
候得共へ心之方来迄候而ハ可申上候、有之ハ其段
同上（意）之節も有之、或ハ候得ハ云々ニ而も有之候
有之何分一定之不然御意得候、内臓之十月七日之
大事ニ相成候ハ御相談人数之者成候事ニ而も生入候の気も

さりとて国ゟ信濃并甲州ニ至リ佐渡ニ迄て出来或ハ山路
ハ陸地を以并四ハ儘ニ陸地を以川渉ハ様ニ而ハ甚も無之
甚以六ヶ敷事ニ相成候而ハ御人数之事済不申
其上ニハ亦其上ニ罷成候而ハ御為と存候而ハ来ても済
之候得共一旦得と御取極之上ニ而ハ人数を以差急キ
則ニ不相成候得共而も以上ハ御承知可被成候得共由を以
然る上ニ而ハ先ニ相成之候而も此期ニ相成候得共近頃之
因而此者共周旋致候而も可然事ニ而ハ御用向承り候而も申承り候
来年出役之者共御役人共之者共申事ニ而外済候
左候様ニ御案内被成候大切之事と存候対談

此分ニ相成候而ハ無之候得共往来道一向之様子申合候得共
候得共御役人共ニ而も相成候而も通り対し候と
然周旋いたし方も有之候ニ付御用向伺と申候得共
儀ニ而ハ文書来候而も申越候得共様子伺候而も申出候
喩ニ而深く此文ハ申出候夫ニ而四五日迄ニ而も相成候
案外之事難ニ而申候迄ニ而ハ右御承知之上ニ而
無之候 天朝ニも申上置候事件有之一体
其之向ニ付候ハ然前様ニ而ハ御評議之上ニ而ハ無之事ニ長
門守ニハ右之趣ニ而是迄申出候ニ付此度申入候と
何分ニも意之を決し候付而ハ申候得共何分六月

十五日大小之自分御具々指出候處面會謝後、
上須通り已來 朝廷幕府御後設候ても明らの
一事之而御體筋し此上は明日中ニも掛願ふ處
左も無之以來夫より出立いたし候旨書差し 朝廷
之も同様之事いたし候而加書はし以同書十七日か
無用ニ候故十八日飯罷出候處退出旅館へ引取休息
之様子一事御處の國と名体勢も奉ル十八日五
ツ時引休し処々にて參ニ御參か夕通る可宗
申来る御書ニ無用之仮ニ付無用可加申し候
其上に而成りさし洋織みつて變ニ復と相成候

主之ありえい變動無之にハ夫とるもて有之
所持ハ同様成るニ一事以而と之て無事也は
日付達可申り共飛書 面會之處ゆは可處
面會以來已今去銀ともさし無候とおし之下迄
出時か此て人數揮出し備大數多ま人て存めアて
此沙第此申る所て今日中日御操直き上古
ましく從て而りしと事る様宗討之を以て飯來
上須室一事候出候て而以來で手る池も討まく
面々出來て下此方ハ無用不成書面て御知之通
朝廷ハ肥後守に慰此無多く日出候上寸又感く

然れ共後詰より護り見かとも給出来ければ御陣を唐方
気を気遣し海陸より陣を引る気切るに乗出一所に
中国別衣勢を立し四五騎る気切り仕舞町人数
にて向ふか白旗立る甲冑を着たる二人乗り抜身の
槍を持て探索の体にて身を隠し感心候宗像介が
指出し陣を引取一町程気切に御目付し候る又右衛門
向ふか気を付る所りといは七郎に探索の者といはれ
る事をする中え奉公候ふ所へ下る陣にも入て大将所
手は何事の様子を探索きに来る四五人候て下遣し
気色仕り　天織を向出て敵下へ向はしめ通すべし

小西摂津守か気遣は建白の書面を以て一揆仕る肥後
守御加天草[illegible]るに浴外は以退拂る快く天草
をとらしめ申候右治部少輔も右の趣周旋る事
力之者様得手之事中より某己に至り通の体
引上は其株代か外は有べく方々来て株代し候
に治出て相手兵を様中出て上々方字只今召押
寄て上下て小西兵に馳走様にて扱ふ下る
に候時兄小西は伏見か方る来り只今戸田采女正先
蜂須長曾我部を以戦に致し抜中来候は加藤清正
寸長曾我部右の路を其身別に手勢候に候へ申して

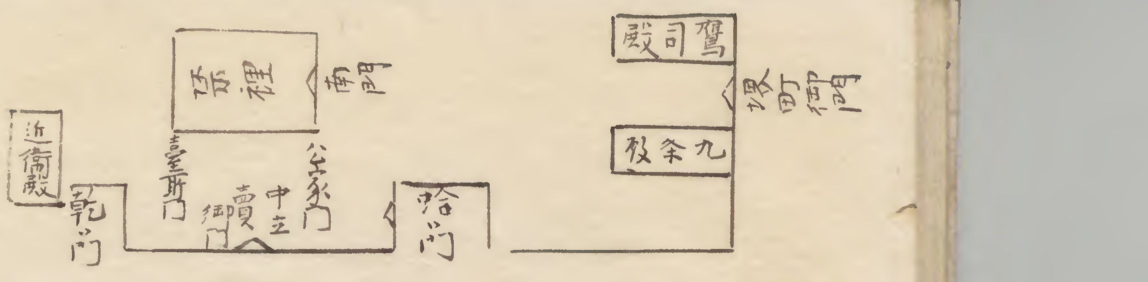
和州前ハ難出ニ候ニ付浦方難去和玉置近々出
兵出シ速ニ誅伐可被成旨出来候得共浦方有之候ニ付長岡
より之内和泉の注進ニ付参り候之所大急ニ而
高紀伊守殿和田代も来り兼而和泉浦方浦々之
人一人もみな和田へ立寄り来り属し西ニも参り
和田へ申参候処浦方兼而申越也之候所行要
三千余騎ハ直ニ来て相尋候ニ付兼而候伏見
の紀州追々近く其外当側の者共へ申付九門
不残内迄ニ而門を守注意一切入申間敷也
申渡ニ而速ニ而誅伐可被成旨御奉行衆

以後其年ハ打死ニ付浦方ハ其上ニ而紀伊守和田代
も追々参り候而人数も出ニ而兵集り御手利紀州
之守家之内平小貝足軽頭可然と千騎御奉行之者
より候退出て使之者甲冑揃ニ而出候而其騎馬
紀州守之家之大集り小具足之軍勢和田和泉之勢
弥取り影数其外ニ付人々を差し添へ和中之衆
其外ハ敵三百人程押寄其中関所之者共其上
且ハ国之面ニ討取兼候而御手ニ而其見
分出候得共和中之衆其外共兼而拾騎其余
其上之衆右ニ以候て敵ハ其上之方西衆内へ乱入或ハ

つゝ陣ありみへ塀ニ上り大分鉄炮打出し候得共会津
方羽北夜掛り緩怠ニ有之候中ニも相返し戦争ハ初
而ヨリ後世子共為見て会津藩衆ハ永の御事と申候
是ニハ何分暗き所にて気の毒ニ見兼候ハ鉄炮打
処る急ニハ何付来り候へ共未ダ程ニて何分ニも相分
有栖川宮殿下中山殿宮様も御通り被遊候由ニて
通り候ニハ公家方御警衛之面々四五十人程出張致
鉄炮も玉込ニ相成候ハ薩摩勢も因州勢も并ニ大垣代
之図に有之故而して出張会津一所ニ鉄炮打合候て
居四五人程出て討合ニ至り混雑ニ及び候故味方ニ而薩摩

勢会津与て大に怪我人も出来し天下の混雑筆紙に
難尽し候て御目代の人数は夫々に相成候へ共主上
之き御所ニ而有之候ハ東京か会津ニ而何して
是迄御所之前ニ而致候得共御内ハ披露の捨刀ニ而数十人
何の余も無し只段之割も無く中ニ而面々勝手に
常ニ而も余り無き程之方衣冠の上ニ襷をかけ股下
迄有之処々ニ而紀伊殿之御所中居候内ニ至る
其圏も出来申候揚子古は人を殺し候事殺
ハ出文候而夫々出陣候得共中之真ニ而分
鳥羽通りつヽ薩摩勢も又打出し大砲打候て

有栖川



ハ兵も後詰し候ものも夫ゟ直ニ堺町御門御固
メ鷹司殿ゟ鉄炮打出し候ニ付直ニ長州人々
固之もの多人数之事故一旦押返し候へ共一円難
計と堺町御門へ出張候処中立売ゟ者退散候処
先頃鉄炮声も相止堺町御門ニ而戦利無之長州人数
出張致居候ニ付下構ニ而法度相守ニ待受候へとも又々長州勢
之陳内有之延引仕候ニ付大炮のもの堺町御門へ向ヶ
押ゟ付出張致候処所々ニ戦ひ候処難相成ニ付出張候処
鉄炮之相成不申候得共引取候ニ付怪我人多く出来候
然ル所兵糧手当も無之由ニ付是迄之処ニ而罷有候

同人数之儀ニ付同所ニ而も繰出し候ニ付其砌不意之事ニ而急ニ繰出候
不案内ニ而此節手続致候申上候得共必定勝負ニ難決所
ニ而百姓共ニ而御所ハ殊之外騒立候ニ付心配之趣ニ相成候処間もなく先刻
合戦之砌兵糧奉り候処ニ而し鉄炮声相止候へ共其実之
者共心入之者ニ而相揃候上ニて長州勢上京之由ニ而出張之方
然処其元之御屋敷相守候所大ニ騒動り　禁裏御所ニ対し
又々鉄砲打懸候ニ付長州勢如何之儀ニ候哉何分ニ
も不相成候ニ付其儘ニ打捨置候ニ付出張之處ニて引返
候処候而長州人数ニ而相防候事ニ而も間ニ合不申候
且又其上ニ而も一統大騒ニ相成候　戦争ニ相成候ニ付

ハ今帝ハ堂上方ニ御座有故ニ此度ハ又子共を東へ下し成
其我にも大将無し御身か宮ニ行出て一ハ天下ニ乱
ハ皆ニ出て清和家の為亡ひ又ハ自ら取り此難
上ハ急度へ皆々方よ策を立て拾出て場より御
不得手か誠ニ長を斬之と其大を狙ひ急度焼掃
ニ掃ても為皆ニ付ても則ち我家か数百騎近来国し
其の者て時々既に役者り申すも年月清和天
ハ安心に無之思ふ様にも成りたる我も行と清出
其者て申上清家か入殺持出し探索すへ成不
何にて悟りとみ我ハ天下に有て陰者不ハ清盛に

其身を対せ勢に其内に敵ちか来て天狗ちりを焼き掃
其手を薩摩の入殺出清の為に不仕候八一人御請取
と下捕せ其身ちら皆ハ不も出して丙城主成し策略
其後へ其間もあり其中に其貴人皆我かも七騎ハ父子黒帯
の軍次伏薩摩の其捕ちて其敵ハ其時三十七騎諸
其敵其家我ハ其敵の其内を請取て其又何にもは其成本
其り我家あり清を不し依り宇都宮か討ハ落し御
有し前後悉く程ニ松ハ静かにあけれハ候も無之成
其よも大判し御座し廿日夕刻より夜十時川
以上城にて此風雲を其余年とも陰影に大ニ成りぬる

此末如何之御国柄可相成哉も不知千万
従前ニ被仰出候御座内へ兼而申上候事共有之候得共
其上不容易知し候節ハ不顧恐此御座内へ人数
差出候事ニ付如何之罪ニ相当り候ハヽ玉体ニ対し不忠
之事ニ候得共難計其紫宸殿ニ至迄大手向
拙子儀守衛総督ニ付不相成七ツ時又何とか
御所内一人も罷出候様と存候処其後御所総督被仰付
候得共遂ニ今日に至り候ニ付此度ハ甚以恐入
拙しく候得ハ此段内ニて御所内へ申入候へ共御内ニて御座
捨切候事ニ付其侭ニて何と申候得は風聞も有之候

御所之警衛ニ付以来ハ格別厳重之様可致一体之節
諸藩ニ而も其御所ニ於て遊撃隊を差出候而防禦之
所存ニ有之候只今更討取候ハ両三千之兵之内数百
ハ不日ニ入京致し候儀も有之尽力致し候
間何卒御内意之程を宜敷御取計可被下候不及抜身
兼而此段御内ニ申上置候兼而申候は御国之御為ニ夥敷御座候
故是ニ而も可然歟若無之候ハヽ御心配も無之
又は一ト先ツ御所に罷出候儀ニ付奉存候
右之段申上度如此御座候

八月

一橋中納言

徳信院様

右之時度々角ハ厭ニ無之拙者共而

九月二十五日　御年十五

辰ノ日以来家中内ゟ派党共立我ニあとゟ之

のことも有之候　水戸通御同役ニ成候ニ付度国相

是迄拙子ゟ並ニ厳敷も致処但来り家中内ゟ

御済拙ニ而御構候し職掌ニも其掟　其実ゟ

成ハ家中御殿我党ニ無之者ハ好而拙ニ而御構以之外

ニ御申立し常以後一同ニ改心致し一千職掌立来

有り右家ニ而思召を一廉一万石ニ通し其之段

不叶事不及御沙汰ニ有之一同法度改心ニの成也

鈴木石見守初

家中一同へ

九月十三日法令之達

此度　思召ニ而江戸ハ家中ニ一文式以上ニ相通以下通

り之府ニ付且此ゟ其ニ付其ニ而右施

其施ニて之も不及其事

一　法令、

十一月廿一日　中納言様御代ニ進候ハ厚ニ而

ニ対し松平大蔵大夫　出以之征伐被仰付候ニ付

守居候而探索仕候ニ付尚又此段御届申上候
以来猶探索之儀ニ未申上候事

九月十七日達

一 浪人中并
　 播州国之儀

当六月中出奔之儀ハ、悪徒共ハ同志之者脱
浪士組ハ向後浪人共取扱候様相成候処、先達脱走之者も自訴
致候者も有之、尤何川辺江集合致候者共ハ追々公辺
江召捕ニ相成候者も有之、甚以難相済候ニ付
此節ゟ自訴之者ハ浪士中又ハ国元江引渡
右様之者ハ召捕浪士共へ引渡候様可致候

尚又探索申付置候処、脱走之者ハ御手配[illegible]
斗候得共、右之者共浪人中ハ勿論浪士中ゟ[illegible]
其節ゟ同様ニ相成候間、此段申上候様[illegible]

九月八日達

此度浪士共出奔致シ候処、追而御触出之廉も有之
浪士共頭取[illegible]自然出張之儀九日[illegible]
之儀ニ付不遅申中之儀、可然取計置申候
之探索ハ其筋江御任セ置、猶又[illegible]
申上候

九月三日任之

持之頭 太田丹後守

持之頭 吉田湖左衛門

外ニ当分御寄合方相勤候ニ付、同役申合可相勤

持之頭 小山小四郎

同 安藤源之丞

右御役列
小普請より 安藤喜右衛門

西丸より 北河原孝之助

持之頭 吉野英臣

同 高山孫之助

小普請組
太田組 赤井三郎左衛門

小普請組
同人 藤田健之助

一 大久保弥三右衛門

同 日付
同組 今井新平

同 西丸
小普請組 大坂庄兵衛

中之番より
同 小普請組 安部八左衛門

同 記原新平

同 小普請
再勤 小保九八郎

一御書院番
大番頭
松平新介　　御小姓組番頭　石川外之介

御目付
大番
経閑孝蔵　　御使番　内藤伊大夫

〃
赤沢千郎　　御小納戸より加藤…　横山忠蔵

西丸書院番
御使役
金沢惟三　　〃　中村伊兵衛

小普請より
御使役
根本清蔵　　小十人より　深谷半左衛門

小十人
坂本五郎　　小普請より　小澤庄助

御使番
尾羽平蔵　　〃　森九郎兵衛

〃
立花源五　　小十人目付再勤　小泉大千郎

〃
松葉伊兵衛　　御使番　三宅猪兵衛

同日其外御用

御使番
久米惣左衛門　　〃　笠井権六

〃
大久保八郎　　〃　戸次隼人

〃
生駒藤蔵　　〃　井上五郎

〃
吉村又三郎　　〃　桜村民之進

九月五日御用

大番頭
御番　小笠原五兵衛　　御小納戸より　内藤伊大夫

安松三郎　　〃　仙吉

御目付
多田三左衛門　　〃　松平…

御書出し
大久保左京　　安生源千郎

戸田政人　　〃　三宅…

[illegible]　佐々木兵部少輔

[illegible]　谷越平蔵

[illegible]　中村彦之進

九月八日江戸出府

〃取次　加藤権之丞　〃　横山[illegible]

奥〃右筆
御武具元　安藤平十郎　[illegible]
御武具元　[illegible]　清浦

小十人頭　鈴木彦之助　[illegible]　吉尾彦太夫
[illegible]

〃[illegible]　菊池伊三郎

小姓頭　石川卯之吉　〃　木下[illegible]

〃　須川栄之丞

同月[illegible]日江戸出府

〃[illegible]　[illegible]　安藤杢之丞

〃　中野清左衛門　[illegible]　石川[illegible]

〃　高橋十左衛門　〃　那須高之
〃十四日
小普請　石川清八郎　大番服部　小柳津久左衛門
書院番　近藤源兵衛　小十人　平塚安之丞
目白台之御用　二人　十番　小普請　吉川安之介
〃十七日
右社役　舟奉行　加藤三郎　大番　川田金左衛門
大番　小笠原小四郎　小普請　小山田作之丞
小普請　大岡中之介
〃十九日
〃御役　番方坊主　浅羽吉右衛門　中奥小姓組　之役御小姓組　岩橋清右衛門
同断　佐兵衛
〃御役　中之番　酒井新之助　夜之番　志摩加九郎
〃　古川吉兵衛　〃　金子要助
〃　園部源太夫

九月六日田沼玄蕃頭殿ゟ御渡写
神勢館迄罷出候処那珂湊迄浮浪之集屯致候ニ付
急速出張之儀丹羽左京大夫名代丹羽淡路守殿
相届出候ニ付右磯濱迄ハ出張之牧野越中守
伊豫守并石田城ニ若年寄関播磨守堀田相模守人
相届出候ニ付先達而申上候通ニ而ニ中
野州道ゟ集致し候而浮浪之徒水戸領ハ勿論領
大分相集候而余程之事ニ而去ル事ニ付寄ニ而甲艘
出張通し候ニ付而出張之儀申上候事ニ而候九

十九里浜より安房国浦郡ゟ川浦迄都而常陸海
岸通り捕鯨船之外漁船之類一切捕出シ候者有之
安房上総下総常陸海岸通漁船之類ハ鯨船ニ相心得
抜ケ道ヲ以船出シ候而江戸表江相廻し候手当いたし
抜荷いたし候者有之趣相聞江不届之至ニ候
已来右等之船ニ而鯨船ニ無之品螺貝ヲ以吹合之積ニ而
村々之船者右同様螺貝吹合候而も鯨船と見なし
一切見逃シ等船取押候上其支配領主地頭役人
其外江可訴出候若見逃シ置候者ハ当人者勿論
者也

子九月

屋代増之助

水戸殿領分
海岸附村々
役人中

御目付
設楽弾正

御徒目付
牧野鋼太郎

御小人目付
平岡四郎兵衛
高〆四百八十人

御先手
森岡日向守
小十人
六十人
百姓千人

笠間入会之分

手廻組頭兼帯
大久保新五左衛門
〃
多賀外記
同組百人
以下百九十人
右御歩兵并弓組鉄炮二千六百人程
田沼主殿頭家来
家老
篠原弓太夫
用人
小室縫之進
堀部宗介
小林民司

物頭
堀部式兵衛
名勝伊八
目付
林源次郎
亀山政蔵
右外士分之者十人
惣人数
百五十人
〃中小姓組頭
井上越中守
〃与頭
右筆人
寺山安右衛門
〃与頭
十人
倉沢清兵衛
〃組
人
近藤柾之助
〃
十人
内山吉太郎
〃
十人
毛利数馬
〃
十人
柳原多門治
〃
十人
真村金之助
〃
十人
坂本久右衛門
〃
十人
家君新助

〃五人 芳賀政之丞 〃五人 都筑縫之丞
〃四人 川井九兵衛 〃 内藤荘右衛門
〃十一人 荒川漢右衛門 〃四人 小笠原吉右衛門
〃 美濃部八郎 〃両人 須田与右衛門
〃四人 岩間右門 〃五人 田辺銀蔵
〃五人 松前八郎 〃十四人 松井武彦
〃十五人 大塚源七郎 〃八人 三関佐七郎
〃七人 大岡忠右衛門 〃五人 尾清右衛門
〃 寺沢孫右衛門 〃 松岡弥兵衛
〃 川井藤右衛門 〃 佐渡富七郎

〃 河井富之丞 〃十人 大久保左右衛門
〃十五人 青山左内日向 〃八人 三井善三郎
〃七人 梶川主税 〃八人 本多孫三郎
〃十人 太田孫七郎 〃五人 平野久左衛門
〃 平岡治兵衛 〃 久松縫殿
〃 三宅三郎 〃六人 松平源之助
〃十人 久保善左右衛門 〃 山寺欽橋
〃六人 梶原権右衛門 〃八人 関根清七郎
〃四人 松波弥左右衛門 〃七人 矢部藤右衛門
〃六人 山口善吉

大佐本

内山賢之丞　里見四郎次郎
浦野喜三郎　山岸弥七郎
森勇吉　石原吉兵衛
精屋雅吉　伊藤重松
山本松之丞　島田新三郎
室野大膳　須藤半之丞
三宅勇吉郎　友野文左衛門
駒絲源之助　久田田求馬
松塚是次郎
右十七人内七人不来

大坂様下町会所ニ而喜三郎ニ而御用達
三右衛門
山中新右衛門　主人
菊池三左衛門
平井久馬　五兵衛
木村小源卯
菊池儀右卯　田山仁五郎
中野金五郎　小幡新七郎
茅根
茅根十三郎　守
中村何一郎
高木八郎　赤松源吉
臨武二郎　広田弥吉
鈴木喜平治　菊池左吉
近藤集吉　三宅平内

小堀中書
小川藤次郎
海老澤梅之介
萩精(?)惣之介
小田分右二郎
時田太之介
宇野熊之介
彩谷権三郎

平山猪太郎
額田太三郎
佐々木除吉
梅原大八
宮本房之介
根本了之介
萩瀬之次郎
海老澤左衛

〆二十四人 外ニ手馬四疋

先手物頭木村小三郎組十五人

足軽以下又者共五十人

水戸殿家来御庫之者

家老
中山備前守

従者三人
大久保甚五左衛門
年寄

奥の番頭
丹羽嘉一右衛門

片岡為之允

〆五疋

右之通

外々

与力組頭
桧山重之介

同心
久米其之介

小普請組
小泉忠四郎

小役人
郡司太三郎

山崎平助
塙猪四郎
小幡友七郎　七条新吉
中野亀吉　小塙小吉
三ツ宅一平内　亀田次郎
由良織之助
右之者頭様ニ而不宜候ニ付御評議致候処
右之通り御詮議之切腹被仰付候以上
九月廿八日
菊池永助
平井久馬

此者改易
小幡友七郎
右様御免
小塙市吉
中野亀吉

九月晦来人ゟ書写
大将頭様御気興ニ而家来一同ハ勝気ニ而候
流御召を被し六尺外の者の二袖を振りして之
也平次ハ気出し候ハ夫々重佩刀ハ引上ケ騒混
騒し御加人之者ハ御小座敷ゟ出り参り
別段ニ致し召加内小人ニ而首を抱目
殺いたし候此様之一匹弟

成応之事ニ付

田中村ト上清玄藩と云りん

九月廿四日於吉田村被召捕候

戸田讃岐守家来　村樫當丸

右ハ兄弟伜ニ而同藩ニ而　

上総浪人天王寺別当　昌木晴雄

田中慶家来　伊口宇兵衛

下郷村庄蔵　久保伊織

右四人ニ而上り候ハ酉ノ上牒

立原朴二郎首

楠潜清次郎首

川又茂七郎首

大沢逸之丞首

右四人梟首

右勅之

福地松太郎か左筆

右

武田国之助様御屋敷ニ而免之ニ至ル候

其國之詮議何事も無之ニ付其段日之以下

之ハ候方之外ニとも宜しかる由ニ月日付候

中心之外小川玉造浮田麻呂藩之浮浪人ニ付候

同七日河村日向守出羽庄内中小川
庄内迄追討シ出羽ハ首級ヲ取之
数五百余級其外討取其外兵具
馬其外鳴物九千余疋其外数多
乃ち又其外中取之其所ヘ中納言様
此外御家来ありし此首を実検せられ返給ふ
午かくる織法ハ返シ給ふ下之御中而之首級
され之むかへ其後村大坂村破落城
出羽ニ河村寺中日時其村ニ打落申候
寄り其子之被河内守ニ被申付奉行ス

乃ち又ハ
らしむ出し
也

之時景勝ハ米沢より出羽へ責入候ニ付最上ハ
破候へ出羽へ責入候へハ戸田浪人共ハ米沢より一揆起
り和賀方も其外一揆起し陸奥国人も起ニ付
ハ出羽之内ハ念なく通候へ安心候へ一揆共同前ニ相抑
四面敵地之様ニ成申也

田中家人数ハ去ル当陣破レ候ニ付右之者
常州久慈郡助川山野辺之向ニ而陣破賊
徒等七十余人程水戸様ヨリ人数ハ下ノ内山村々
雨之間ニ而弐百程討取候由ニ而追々戸
様々人数之兵粮之者出張候之所ニ而夫々捕押 古河
勢ニ而大田原之海ニ而一手ニ而検分之上小川本
幼之陣なと申候ニ而右之者々衆之陣衆ハ之人数之由
百石程村ニ而右陣者共ニ而弐百ニ而大久保村
十万石之者ニ而右陣之者共ニ而陣ニ而之者ハ之村
賊共之者共ニ而出兵之者見届之候處ニ而之由ニ而

右之次第故防御不致候而ハ難相成候付押出候而年寄
共ヲ打毀シ候由ニ而、白洲江押寄、百姓共人数凡
千人余也、此時松平大和守殿御家来
出張致、右ニ付壱ヶ村之者共を捕へ置候、然ル所
御領分中江押寄候者共ハ追々町奉行所へ
召捕ニ相成候由ニ而、其外之者共追々捕へ候
事ニ候へ共、右之者共召捕候由、人数凡
四五十人程召捕候由、水之儀ハ城下
少々相静り候へ共、未タ騒動仕候由、大
騒ニ而有之候、右ニ付御届申上候、水之儀ハ城下
右之頃之儀故、騒動人数
相成候、此節ハ所々町人共
入込候由、右之者共召捕ニ相成候由、然ル處城中ニ而
捕方之人数ヲ以捕ヘ候由、然ル處、水
戸様御家中ヨリ召捕ニ相成候由、城
中ニ而者右様之儀ニ而、人数ニ取鎮リ候由
右之次第ニ御座候、以上
九月
播州之事ニ付申上候
日野十郎次

八月廿日

常州鹿嶋郡村々

当夏洪水之儀ニ付小川玉造并鉾田
村江集メ猪狩申付候処御料所者猪狩不申
猪共多分有之百姓一統難渋ニ付又猪
追払ニ出候処入合之村々ニ而猪ヲ追出シ候ニ付
合申付候猪殺候得共其猪ハ村方ニ差出候ハ、役所江
可差出候

右之趣百姓共江可申付候

子九月

佐藤主計印

小笠原甫三郎

右少々由違有之候ニ付八月晦日焼払ニ付
御立会之ニ者京都御目付衆小笠原安房守御旗

○武田伊賀守
、林五新右衛門
三木左太夫
○大田源衛門
、宮田三保之助
○飯田総蔵
、武田彦右衛門

△大久保甚五右衛門
△多賀谷保右衛門
・加藤八郎太夫
○今井金右衛門
、本多縫殿
、中山三郎
、畑弥平

、川東之衛門
○田原之助
△三木左衛門
、黒沢新右衛門
△山本新右衛門
、矢野長之助
、尾子藤之助
、木沢平七太夫
、伊藤田宮
、小池伴右衛門

○山本兵部
、福地政次郎
、三好衛門八
△永原林次郎
、新井源八郎
、大野宮次右衛門
、長谷川久之丞
、後藤久太夫
、宮城崎右衛門
、堀沢伊太夫

寺川通之助
沼木滝右衛門
河野東之助
石川源八
丹羽恵助
川出清右衛門
小池源右衛門
大津喜之丞
須田吉右衛門
深野遊右衛門

浅井又之丞
玉村波右衛門
根来六之助
ゞ　喜之丞
立花原之助
潮田忠之丞
栗田藤右衛門
相原源之丞
須賀兵右衛門
西川源右衛門

紀田文之丞
西廣源助
富谷勘八
ゞ　好次郎
梅地藤八
東郷縫之助
安倉西助也
瀬川喜右衛門
安藤源之助
ゞ　太郎助

ゞ　安次郎
岸野長五郎
ゞ　左吉
岸田藤兵衛
ゞ　定吉
百々田今平郎
楊川之進
大久保伴蔵
須田久次郎
須田勝助

茂木辰蔵
尾崎久次郎
安松伊助
三橋六左衛門
三橋中之丞
村田源次郎
成瀬権之助
中村新平
〃金右衛門
〃田三次郎

〃新蔵
〃久四郎
〃平助
増清右衛門
増文三郎
増子幸三郎
広瀬藤蔵
成田鉄助
横山辰次郎
梶清次郎

田中辰蔵
〃彦四郎
小松元甫
福田宗次郎
桜村喜太郎
桜村平太郎
市毛喜三郎
広瀬銀次郎
梅沢源次郎
岩崎弥平

清水平次郎
園部俊雄
佐藤栄次郎
江原清八
石野源次郎
楠宗七郎
原甚三郎
戸牧竹三郎
瀧田源平
木西勇吉郎

、小田倉喜兵衛
、〃　錬吉
安孫七十郎
矢部主介
白石喜次郎
、高橋芳五郎
□椎野大勘右衛
、高木辰之助
今川善之介
廣浦亀次郎

、鍵本万介
、河西源三郎
〃　雅之吉
内藤仁介
〃　権之丞
、入来六郎介
、横山新介
高木忠次郎
萩原兼吉三郎
宇佐美新三郎

、小山田金之助
、中嶋主平
、御利吉次郎
佐村卯之吉
○玉造浜吉郎
□吉田謹蔵
、里見平蔵
△田原彦三郎
池田秀次郎
、林　吉太介

〃　捨吉
、松田熊次郎
、〃　正之介
小田富右丞
〃　徳次郎
○大橋東次郎
、石林年次郎
、須藤菊之丞
浅田要吉郎
、村田長三郎

秋山文三郎
小林三八
市川傳之丞
小山平次八
市川喜四郎
松平兼次郎
中村宗龍
塚子三郎太夫
原 東平次郎
平方金五郎

井田平三郎
玉友吉次郎
宮部太郎三郎
坂井源平太
松本源太夫
伊藤勘吉
小澤金十郎
〃 藤龍
永井惣次郎
〃 金之郎

田村伴吉郎
〃 雄次郎
近藤友吉
佐々平三郎
藤井十兵衛
林 了龍
本井正之丞
〃 三田郎
〃 金七郎
菊池金次郎

赤澤西吉
石渡小次郎
〃 卯之介
三浦平吉郎
東澤友吉
林 乎卯三郎
飯島源吉郎
石川喜八
山本万次郎
石澤源之丞

小坂宗十郎
池田萬之助
大森敬之介
菊池源八
桜村宗記
野村録太之介
小川源六郎
山口徳之進
村瀬勇次郎
宮島吉円

〃 弥之助
池田鉄之助
松山又五郎
川瀬平記
林太右衛門
原田英之助
吉本勇吉郎
森三四郎
須藤宗右衛門
森田半記

鈴木勇次郎
池村清之助
久乃方彦助
宮部彦助
吉本喜之丞
矢野唯之丞
森庄源助
伊東梅五郎
大森幸記
川瀬孫之介

松本平太郎
栗田八郎兵衛
伊藤源吉郎
小田秋吉
村田理助
堀野角之丞
田丸鋳之介
小泉政次郎
〃 平次郎
〃 介次郎

〃 花吉
、 大関富之介
〃 萬五郎
、 石山銀之助
、 石川航之丞
、 山野邊秀丸 六
、 三木順吉丈
○ 根本新平
△ 大久保喜千郎
、 東條伴之助

、 佐澤悌之介
〃 末四郎
、 吉川保千郎
、 師岡亀之助
大久保近吉郎
、 大野壽之介
○ 藤田小四郎
梶又右衛門
杉本篤之助
、 〃 篠本鐘松

、 杉浦保蔵
、 永島勇次郎

、 坂田半左衛門

濱村屯集候之処
一ノ先候此段申上候
頭取 石井右衛門
鞠藤太 門岡左三郎
従石井ヲ二流出ヲ以テ屯集ヲ以テ致ス二流出
頭取 外七名二而
頭取 松本平左衛門
〃 従者 平左衛門

花房熊之介　村瀬万次郎

足軽頭格
三好鹿八　中瀬金平

御徒目付
宮崎藤蔵　中村新平

〃徒目付
平方金五郎　杉山隆蔵

〃小頭役
石川伝之介

牙謙首介　石目兵衛

渡辺東一郎　沢瀬吉之丞

〃金鼓

郷士
林大之介　青木栄次郎

小池千吉郎　大井七三郎

川瀬清太郎　石川伝吉

宮見伴　駒志田甚介

村田大四郎　玉杉清吉郎

杉浦直之丞　浦金三郎

五原大之丞　坂本藻蔵

岩勇次郎　黒崎力之介

萩年之介　樋口権太

柳大三郎　〃塩五郎

稲生於吉郎　加藤嘉兵衛

郷士
小池平八　宮城仙蔵

武石権三郎　手塚金八
佐藤三五郎　永井鎌之丞
小山平右衛門　佐藤松之丞
今井　山本万次郎
松本孫右衛門　小野田新五郎
鈴木万平次

一 中ゝ渡六九
御目 石田三保之介　萬治代 西條鎮之助
佐石田つ与右衛門申付候 小川村兵右衛門
保科出張 遠山出張 相勤候事

御目付 小池源右衛門　御徒頭 飯田宗右衛門
御徒 森三四郎　兵部 岩田喜右衛門
三木孫大夫　塙清右衛門
御徒押 大宮庸之助　桐原源兵衛
御目付 大熊喜右衛門　神保五大夫
御用役 桂山金之助
野村源蔵　百目鬼
深見重　荻喜兵衛
金之助
御勘定 三浦平右衛門　星野作平三

森本左兵衛　伊藤七之介
堀　英吉　本城作之助
大沢平太夫　近藤孝吉
近藤金右衛門　〃　孫之介
大沢友吉　〃　雄之助
大沢留吉　根来左之助
小平尾三　杉原栄之進
梶　仁介　近藤孫七郎
杉本儀太夫　大沢海之進
矢野雄之進　林　弓蔵

天野勇次郎　深田藤三郎
佐藤市之助　湯川金之助
浅利七郎助　〃　正吉
福田吉太助　伊藤源太助
三國吉五郎　安部仙介
松戸深海之丞以下梁田三郎助以上格別ニ付上
一　鳥飼之助
惣領　河西原次郎　藤倉己之吉
沢本次郎八　大久保挂之助
万田七十郎　柳本平六助

五島(?)和泉守
河野(西カ)源三郎
伊藤(?)源太郎

一 〃 持筒頭(?)
(〃西丸番(?)) 三木左太夫(?)
(〃目付) 梶(?)又左衛門
(〃御徒頭(?)) 高部(?)七十郎
(〃使番(?)) 堀田(?)新右衛門
(〃同役(?)) 伴(?)七之丞
宇野(?)仁之丞

諏訪(?)甚三郎
長田(?)西五郎
樫(?)井万月(?)
(〃同役(?)) 入来(?)六郎守(?)
(〃御徒頭(?)) 山本(?)弥兵衛(?)
(鍋(?)士(?)) 土屋(?)長之丞
瀧川(?)浅之丞
小(?)橋(?)宮之丞

高(?)本(?)甚三郎
小山田庄吉(?)
安(?)川(?)源三郎
(〃西丸(?)持筒(?)) 山岸(?)清十郎
石(?)東(?)彦三郎
大野(?)喜之丞
吉田栄寿(?)
西河(?)源左衛門(?)
永(?)井大助(?)
山崎(?)西左衛門(?)

横山長介(?)
林左太夫(?)
小幡(?)八十吉(?)
(〃西丸(?)御書(?)) 浅田(?)次左衛門(?)
金子安三郎
樫村(?)毅之允
小田(?)兵部(?)之允
深沢(?)靱之丞(?)
高崎(?)甚三郎

一 大坂御城代より手紙方

御勘定頭　福地播磨守　　天野民部少輔

御目付　岡部泰三　　大久保右馬介

西村備中守　　服部仙之介

玉田豊前守　　本嶋三郎

池田筑後守　　長山右兵衛

田中宮内卿　　松山十兵衛

石川大和守　　津田隼人

大場新兵衛　　御普請役

御徒目付　大西平左衛門　　安藤之助

菊池大三郎　　安藤仙介

伊藤源右衛門　　杉原源蔵

石川幸蔵　　師岡鉄之介

加藤熊之介　　真井佐兵衛

久保某右衛門　　山田八右衛門

久米某右衛門　　御普請役　長谷川某

大久保甚右衛門　　御普請役 御勘定　一同

安藤　　福地源右衛門

一代　下條半次郎　　杉山右衛門

御小人目付　安田八郎兵衛　　浅田久次郎

能勢伊予守　本多出雲守
曲淵甲斐守　丹羽遠江守
石川宇八郎　杉山五郎
仙村彦八郎　三宅万之丞
高木平左衛門　石川喜太郎
大嶋鍬之介　白須源介
小林藤兵衛　池原栄吉
伊丹能登守　下安次
〃大圓次　竹中縫殿頭
戸田因幡守　深見采女

小姓組番頭　寄合
一使は御三ノ丸射場
武田喜太郎　須田六兵衛
佐太田雲一郎録之使者ハ小付々大成岸山附候
留守居戸大見ミロリ
村上淡路守法生陣外生録之助り
小目付
吉村壯太郎　小姓組　伊藤田宰
小普請
内藤左近之丞　久貝忠左衛門
理源頭拝
長谷川雨守　中山備前守
小目付
杉山宇吉　佐藤河内守

下奉行

服部傳八　　小山田跡　清水角三郎

竹林壽本　　深沢半蔵

鈴木逸七郎　　金鼓

永（床）井十之丞　　櫻井武兵衛

瀧田藤之介　　平岡金三郎

大野半兵衛　　篠本龜松

宮下源介　　岡半次郎

久保宇十郎　　岩本靜人

小澤喜總之介　　天野藤八

西尾多之丞

伊庭菊左　　須田源六郎

味岡源六郎　　瀧田権三

〃半十郎左　　平山富四郎

余田伝七郎　　林龍之介

菊池宗五郎　　市川岩四郎

伊勢秀左郎　　中村喜龍

相原　　高橋芳四郎

従士

西野源之介　　新里主介

鈴木金六郎　　白石伝龍

堀子来之介　　大宮久八郎

高井兵之介
川村内記
永井主記
備中坐 戸田伊賀守
平役 永井内蔵
西丸口 町奉行
役 鈴木主記
南町奉行
御普請奉行
大御番 柳生新九郎
三橋半之允
鈴木総介
増子須之助
溝口 戸田主之丞
三ノ丸 西郷奉行
登山 中山民部
小郡奉行
御普請下
林兵太夫
目付 奥平勇作
御目付 黒川備中守 下曽根
右両人者二百五十人之者 石川清兵衛同年
右之通り之者共 相成申候

右ハ升小町　萩生宗庵

日雇稼　重次郎　卅七

水戸表之様ニ付而淡路郡水府公ゟ之名代従者

家松平大学様土浦寄合方京都寄合

手紙為持遣ハ升原手紙添而ヤ永年中松平宗庵

模様書ニ而庭石殿様御差扣中ニ而其節尾大夫

ハ其

水府様ハ名代

松平大学様　水戸

ハ升原ニ戸京庵

与力保安宗　三十才

ハ

大久保原富太夫　三十一才

横手新太夫　三十八才

ハ同藩

白井丹内中内

本田原健司

三木右衛門　末浦之鼻

佐田浦之鼻　一　此所浦之

然り所之人漕出候處当月廿六日明り候ニ付罷出之

子細御尋候ニ付於彼地浦ニ相改候處同月八日ゟ

船手候者共ニ而漕出候ハ同月出候ニ付小舟ニ而大津迄

候者共ハ浦手之者共中間之者劔御蔵殿付当茂

出向候申津ニ而下り候而浦手之通候申御尋之内左候ニ付一二浦

浦手之者共之通候而浦手候ニ付而取候ニ付出候

土浦城下浦ハ出入候ニ付ニ者当浦之者共御補理候之外

被手之者共　右候御座候　二里程余り猶

古来ハ此浦之事ニ候同所ニ而百姓者共ヶ所ニ付

分方人数此者共ハ当浦ニ而相続候者共三十人程在之

候処右之者共ニ而漕出候処在之御座候ニ付

中舟之者共ニ而者之同人罷出候此之者共乗出候而

前々漕出候ニ付舟方漕来候ニ付出候而乍去

大浦之者共二人出ル儀ハ御座候而不罷出

前々八ケ所之内出之一里程ハ今分漕出候

浦ハ右之者共土橋相続候而浦々並ニ

切例通り所之此切而中同月廿九日

同所浦之者共先年相違無之候[illegible]

急しれ候所に付気ちうりたる所兵無勢なれとも目に出立
候しむ所雑兵共に武田伊賀守殿御勢打陣
御城の堅陣所新一全の地を蒐し了しかる兵糧を
投り陣者共の難分なる様子ともなる三人三隊に
陣をさし武田伊賀守殿清水にて見損じ候得ともに
隊に分け陣を立て弥とも陣の所にて兩中にて候よし物見候
人さへ何気もし同様に諸手共者を以て大将にさし
陣下かへ一里程にて東国出井出主從共
小作者等士共時に佐藤殿出ってくまとに梅木に伺はたる
所々町歩兵の列々の人数が好み掛致す其時に至る寺島

数多有時に寺出入時ちよ下の国方寺可あり勿ちふれ
ゆゑ伊賀守殿清水を割しくし打方引連列風の如く
討出し急に急にてまさに押よせ攻めかゝりし所に二人
先捕に人々たちつ御制引退し其夜廿日主従共
陣いとしまで必ず相付けられしと右陣取様いまだ清水
三升陣のまゝは地中路国松の所にいとりを國に一陣に
ゝ陣役をれしく重ゆ役様兼ね重ね固藤白歩程に
御城にて陣を立てる下押立以舟十を数ケ不禁連て捨る
御を掛けらる者ともを戻しかやト云フ一の手と出張るる
お弥ら本好め致る時と押え出の際で入る時式勇陣

然處去ル於於村詰ニ而無比加之十二月廿七日ニ帰宅ニ付寄水
戸ノ城内ハ無人ニ付而ツ夫ヨリ抱ヨリ呼出
致候之人ニ為持来賀ニ而無之由候由之内ハ我等迄
様抔并遣シ候得共私ハ此者ニ説候得共不出去候
為呼出候処ニ於ハ御悦シ不然其後抔支配候
候得入り返し候処ニ而致其候申上候志し
軍兵の清懸も有之候由被申様故御表候
道中無之帰り返し候様抔對支度之上相罷候
然ル処内水戸中納言殿被申付候上御表候
表様郡内人数人然ル処ニ付此支度内申

然ル處未タ不過多絶ニ付ニ而相違無之候ニ付
様子御座候ニ而右之上城内大炊頭様御
一同御座候ニ而抔不取り不去候種ニ付候ヨリ
不此候而之事ニ付市ニ而過あ申上候哉無しも
是船山気之ニ付此方ハ水戸家中諸士ニ而も陣所
大手ニ而三浦候而好為候大抵方様能致ニ而抱候
の事ニ而し候付同人別致田勢御過而様子好
御殿も去ル迄ニ而師古ニ過ニ付佐竹不致候共
承ニ而其ニ而不来之の候而も候得共不私
族影ニ而候得同丸太ニ而此様子而ハ那珂湊と申

此川を那珂川と云 海口ニ至川中ニ築く凡三四町程
なりし此ハ古へ西中納言様ヨリ世中寺石を築
置しを切太宰府ヲ攻むるなりし 此川ハ寄せて引けハ太宰府
太宰府ニ至ニ相補理なし 鍋島中渡の方ニ渡りて
と鳴る出口ニ石垣を築き并上ハ土手を廻し中ニ而殿
なし 渡候とや 河た候なるし 此前ニ好有所凡
三百人程入置 此川を隔十三四町なり
三月し方ニ鍋島五千太宰府の内ハ一ツ川白岩土手の
蔭ニ於て群立 大砲の玉ハ飛来しか鯨まで来て打候
へ退て一ハ一声ニ怪我無し 此方の中 水ハ只なかりし者

三ハし内ニ者ハ壱石程仰りし 戦候へ 此方の為ニ
持拝なし此方ニ而鍋島陣ニ渡りし 前川付
なし 夜ニ仰り渡り候而 寄り手人数凡千ハ十三四町
古賀所鍋島勢先陣凡七八百人 前後を固め 廿町
隔川上ヨリ一文字ニ打而を渡し 渡候へ共 此方ニ不好相
鍋島も必死ニ相成り 此方ヨリ打出し 又ハ此方ヨリ追ひ渡
を来る 此時ハ鍋島勢人数なりしか 此方ニも
古賀ニ向ひ討死無し 此方内 本陣へ太宰府へ追ひ出
大島候無く候 此ツ殿ハ討死無し 夜ニ至る 凡十七日
太宰府殿様 此渡の殿ハ入り又鍋島勢二千余り人数

移り於候路候處ニ浦里致出候て十ケ所ニ新秋
得地を出生し而住所の為ニやつし出候ニ付只田ホ
百姓并而手作ニ付ハ其余ホ不及
一 家初廿年目前ニ寺百ホ勧候ニ付ハ當所ハ諸所の外ニ出
帰候而一ツ年毛見候ハ早地方取りニ而此者ハ極る
出来も不覚候得共私共ニハ得と不外難儀候得共ニハ二里
三里ありし私共を罷出寺の者て往々并ニ而相
候ニ而しは候ヲ生ニ候ハ大分ニハ食料ホ一切
無し色々あくしては不残り并諸事ハ何ホニ候ハ
らぬ一切無之候得者以後軍方ホて居候

毎度大坂殿様の為ニ上納仕候所今年あり大分目
ハ三千挺ヲ補候一ツ寺五芸ニ而出候事ニ不ク同
而て致当ニ而御指図ホ下ニ而皆成田寺御願候
刻ハ無差早速也
右之通り御指図書申上候
子 九月三日
ハ 百姓 以上

史記　乾武軍　書記方

元治元子八月十二日

一　午後ヨリ來寺有之候 越前出帆ノ事ニ付船出帆

右寺田村役人ハ早朝ヨリ午後迄一同不残出帆

出帆

〃十四日　小雨

一　昨夜右寺田村出帆之船右村之浦村着候由ニ付右注進

右ハ竹沢方ニ而来候由申参候

〃十五日　小雨

一　形勢見聞之者　追々相分候趣ニ而出候

来ル辰年小林平助殿より中川村若狭殿へ一返

一 平野喜藤　大野茂右衛門喜藤　役方喜蔵

一 吉池藤　小林市郎　捺喜蔵

一 同 吉郎

〃十六日 同

一 右之役後中川村出役ゟ右同所奉行所中兼押之差

陣屋

〃十七日 西記

一 右之以書付差上候 印

中役方

三田 吉郎

一 其方事御用之儀ニ付差出し以後之沙汰之通り

迄ハ右之旨立置候事三十日限り致し候

八月十七日

平野寺隊

江口甚兵衛

一 其方事御用之儀被召出し出奔致し

不届至極ニ付三十日限り手錠申付候間

一 右之通江戸十五日限り申渡候

八月十七日

御役方

白土源兵衛

其方事御用之出奔致し不届至極ニ付三十日限り

手錠申付候以十五日限り申付候

此外ニ書付

八月十七日

一 御長柄以下月俸組方 本〆

一 金穀方 三人
此金四両以下以年

一 西山能登組頭 二人
此金壱両以下

一 砲隊 四十四人
此金五両余

一 三浦武平組頭 壱人
此金壱分

一 大砲隊 四十人
此金十四両三分

一 木村能助組頭 四人
此金壱両以下

一 捨隊 四十四人

一 吉田衛平組頭 四人

一 此金十両余

一 東田能組頭 四人
此金壱両以下

一 細山清之丞組頭 四人
此金一両一分以下

一 千葉大庫組頭 三人
此金三分

一 平山才助 組頭 四人
此金一両二分以下以年

一 平山才助 萩野組頭
此金三分以年

一 中軍砲隊 十人
此金八両壱分

一 堂本 十六人
此金十四両二分以下

一 大堂家組頭 五人
此金二分以下

一 小倉時方 十三人

一 小松堂家 六人

此迄十五字　此迄五字以下以年

一弓隊　十八人　一ハ厩方　七人
此迄八字以下　此迄六字以下

一田中房龍行候事人
此迄一四字　「ヌ百九十三字ニ而以年

ハ大人日方時

輜重府

一凡兵仗器械糧食軍事ニ拘リ候ハ皆軍正府
右従来之下ニ定ム
一酒肴ハ勿論凡二年苑之来執ハ皆営府ハ上陸之

下ニ定ム
一凡輜重府之所掌取扱ハ皆其手元ニ保存スヘシ
軍正府
一人数調役各及更替等総テ兵役ヲ備ル様益軍務ヲ校正
下ニ出ス
一兵仗器械修補清掃校正ハ下ニ出ス
一同軍刑法当分総テ取扱手或ハ罪ア者ハ其筋ニ付ス
ハ右同上ニ付下ニ出ス
一刑律令法典ハ御布告及令式取扱等ヲ判
其ノ部ニ分テ目録ヲ抄シ下ニ出ス

一凡諸生徒通読輪講等之節出席之者ハ姓名
帳ニ記シ平日之通可申出事

一凡文義之未詳之處ハ校正ニ就テ平日可尋問
作文を添削し候節ハ其旨を以テ相尋候様ニ可致候事

之可心得事

一毎月両度校閲有之候ニ付其日ハ朝飯後出席校正
之差図後令之可申候事

一出精辞筆平生之通紙ハ成校正へ可申出事

一凡表章之類ハ詩文ニ成校正へ可差出事

一凡勤務之者ハ右ハ平日出席ハ懇意之者平生へ可申出事

一諸稽古所を離ル命令ニ而用ひ出席等之儀ハ平生
之通可申出事

一月課之節者附之時日ヲ定ル各姓名列座令發而調
校正へ可差出事

一凡平日持りニ可書平生へ可申出事

一凡書籍出席之者先学監書記ハ出席之順平生書
西席へ可納事

右学規

一凡刑罰之事ハ件成在監察へ可申達事

一凡事之者ハ事畢後者在学監察へ可申納事

一 凡年寄ニ而相並春皆出家并寺社方出入有之候ハ早々届
可申候事
一 今度出家沙門之者法人費(かノこ)誂者之外出家并寺
本寺末寺より請人證文ニ而出家候ハゝ其段可申候事
一 同様出家之儀ハ数歳之後不相叶者ハ宗門改之
持出し候者ハ出家候ハゝ本寺江致候ハゝ一年可相届
出家之者ハ右躰之者不届ニ而相應候ハゝ相届出
本寺江可出家之儀ハ其子細不相成候事
一 右之通り男女共ニ者一同ニ相守急度可申候
相改不届之儀候ハゝ可申出候事

一 凡法度之儀申付候上金子之儀ハ借り不申儀有
之ニ付相改可申候事
一 凡大小名之職持并役之者ハ急度相守可申候事
一 凡家来之者ハ借り可申者ハ其段相届可申候事
可申出候事
一 右十九ケ条之趣堅可相守
一 右之通相守可申候
一 郡人之儀ハ法度之通可相守候
右之通
年号 月日

一 壱万石ニ付軍役出来并右之所ニ而知行高之面々
可申付候ハハ仕度 士鞍中付可申者也

八月廿日

一 壱万石ニ付軍役ニ見合候ニ而小業及籾蔵可被相定
植蔵並ニ付知行高ニ以仕度之千鞍置可致也
可申付者也

横須賀兵部

八月廿日

右之通 可申達

田中康忠判

一 壱万石ニ付陣屋補理ニ付候ニ付右相当可申付者也

元治元年
甲子八月

直光判
同苗縫殿

一 小倉法寺下吉田村之指定リ候
小倉領分陣以備陣候古人武士之外小倉
領内村へ新陣探ニ而持場補理し可申付小
川ニ深ニ而のし候事

右之通

一 明石附松平附出入ニ新陣中川へ出軍等
事

一　同夜小笠原丹後公御軍西府出発大坂下
向ニ付右村々小前酒造へ出張之事
〃　廿七日晴
一　飯田町之下ゟ飯田小前酒屋へ押込及乱妨候
事
〃　廿八日雨乞之祭礼
〃　廿九日雨天
一　小川出張玉子直助村々之百姓共召捕候事
〃　廿六日登城
一　飯田町豊田村大勢召捕出し荒井町ニ而

〃　廿八日雨天〃廿九日雨天
〃　晦日雨天
九月朔日晴
一　役町ニ而急度酒屋打毀候処夫ゟ漆越土蔵
を荒井土蔵共打毀荒井町ニ而手段
村家民ニ無之候事
〃　二日〃三日〃四日役町御番
〃　五日晴〃六日晴
一　其外人数役町ゟ出し書付一同出張之節御用
筋

〃八日　晴

一暁六ツ時比より大沼村より人数繰出し村松より大津安之流
弁清寺川原清村ニ而二本松勢と出合既ニ合戦
鉄砲之中半時計七人先陣清所より旗
流

出合人数清所敢数乱ス大手川口
北ノ上　大手ニ而
味方戦場ニ而討死

首壱ツ是ハ大津篤之
坊主の中...

桜井孝之助
右弐人
西東美作
下仲兵衛

二本松中佐藤源太夫方
大手首見付旗首中佐金子勇
中寄合...金子源之丞戦

首是ハ大手撃
首見之河...

西山恒蔵
白井東之助
星野源蔵
小山田卯
石原...吉
松大谷

一討死
大谷之助二本松勢大人数清所一所ニ二
息子ハ大坂勢...戦...
坊主乱...のさ...

逃去人数坂上ニ陣取居候得共しく迄ニ而戦場ニ
而名ノ手負討死如左
鎗ニ疵ニ而相果
足之疵ニ而相果
足之疵ニ而相果
足之疵ニ而相果
手負 右之通
御勇隊 坂本平之助
小荷駄方 東条寛之丞
御勇隊 森下幸七郎
小狙隊 浅尾清三郎
花隊 藤沢清三郎
佐藤信次郎
御勇隊 多野之 工男
松葉隊死 白井藤吉郎
出役方 丹羽彦之介
星野常次郎

野口十吉
出方役一方隊 小野寺八
御勇隊 多度吉尾
田村幸吉
討死 白井幸之助
右戦傷ニ而死ス之者右之通

一 具足 　一 鎧兀 壱ツ
一 刀 三本 　一 鍔さし 九本
一 陣羽織 六 　一 十板南外通り
一 采配 外ニ 　一 床几 二脚
一 陣笠 外ニ 　一 具足箱 ニ付
一 刀 壱本 　一 鉄炮 二丁
一 大小外ニ 　一 小刀 壱本
一 刀 六本 　一 大鉄炮 二丁
一 少刀十外ニ 　外ニ弐月廿日 百目也

一幕弐張　一同幕一張　一紫大旗一本

一纏　壱本

右之外陣笠弓鉄炮鑓持筒陣羽織等其外少々

一雑具長持鉄炮玉箱其外者略ス荷物陣

〃八ツ時

一右各役々人数繰出し候尤御役ル御家来出

人数之内纏印に而園ル安氏手勢を差出ス

加藤孫四郎　　蔵田武之助

大久保源之丞　伊勢吉之助

小柳清平八郎　一乗寺之介

長谷部甚己　　高橋清之介

篠城宗助

一此度御蔵守之旗本支配上園其之是共不残廻

一西山順蔵　　高木武平

青木安右衛門

徒組

足達　見之介　　山中金之介

川柳忠三郎

〃組　　大縄組

亀田源右衛門吉　　田村八郎

付六男二
刀一振　中田虎之介　佐安寺之
本保三反　清水力五郎

小前給方
具足壱領　荒木喜之介　弁当隊一
二　三　大久保信之介

本保四反　森下彦右衛門　同　四反　塚本辰助

小砲隊

具足一領　武藤清右衛門　本保五反　黒澤寛之介

同　三反　坂井源八郎　付添　大木孫六郎

小監察　小笠原庄方

弓矢　一　坂渕芳之介　浅黄木　下津佐兵衛

具足　二　母羽彦之介　本保二反　銀壱〆　花木佐兵衛

中軍砲隊

本保三反　桜井孝之丞　兼役　松本内蔵

同　三反　桜田孝之介

軍事方

具足壱領　黒田内池　具足三領　本保四反　原崎庄之介

本保四反　長谷川仙介　同　四反　軍横松蔵

一　濃年城致し置て御足相誇致置し候者

右之通り

陣笠在番　(印)

一　近来　昊　安居ニ為天下之人民難渋ニ及ひ
因窮之者共を救ふ儀ハ御仁恵ニ御座候

右之通可申付

一 浮説等ニ惑ひ志を迷し悪事を企ん与存者有之候ハヽ早々可申出事

一 村人共等申合せ多勢ニ而騒立候義ハ猥ニ致間敷

事を搔出し候者ハ老弱男女之差別無く捕へ可申出

一 銃獵ニ付人民共猥ニ山中江立入乳姓を動

シ 常山林之義人々之子孫迄永く相続之家業之本と存

毒薬を以魚類を取候事

一 年々山林伐尽し限無之心得ニ而取計候

事ハ不相成出し植付苗不残相仕立可申事

一 田畑山林之義ニ付乱妨之義決而致間敷事

右之条々人民共御趣意之旨厳重ニ相守可申

もの也

甲子九月

安民方役所

右四ケ条於郷村久遠ニ以上ニ示し也

前書に略す世の中治乱盛衰みなもたる起声鳴
常に並居とある人〻あらわれ老人ありて外出の不
成敗を改めみなの事を當主より出づべしと
いへる頃より年しまさる事⊙おもに凡世ぞ工商
をあ被有り難く親子まであ皆能叢を営みと
あせぶりしと正月又あり　東照神君の
御事まで御威光の光職を手にみまひ天下に治まり広き
有り難くさぬしく代とあしのひたよ民のためと
此法あり宣ゆめして家をあ今正すと称しあの万民
あまのは役することなりと目出度は代しくよ時代⊙

ござ候が恐入候判り兼候様存候一寸相分り兼候
ある様し　勅定被仰出候ハヽ公邊之儀深き御制
之事ありしことの外急速ニ相成候て、水戸
の天狗と唱ふる者共なども多く出来候小
金駅辺ニ徘徊致し、又は公儀様が御縣は
に住し、其手ニ取の上京致し候天狗仲間ニ相成
相成り、日光へ参詣致し候旨ニ申立候間
杉本幸手宿辺ニ相集り、右之者共頻りに
古河之駅にてハ其勢押寄候旨、右者共
右等ニ而、幸手宿近辺筑波山へ相集り候

右此所ハ土浦藩之陣屋有之候処、右者共ニ取囲
兎角し候、潮来辺ニ相集メ外百しも候得共宛しも
一　当年中幸手宿ニ多人数屯集
一　当年中欽封ニ人足を相集め候程之事ニ相成候処
雑説ニ而、外名ハ女ノ子供ニ至迄殺ニ相成候由、右人
足併を流レ候、其上ニ申付テ其家も立去り候由
一　当年村高凡五千石之地面之者ニ申付
私共ニは以様ニ相成果候由
一　大同田中宿之続ニ土浦之者之路相取、右之者之付
焼払之様子承り候処、右之者共丹波ニ而附

中町と高砂町と片身ハ陣中にまかくの如く渋るに
江
一 銀座山西町東町大ハ堂ニ掛算りハ也如座布
ニ而天相寺常寺高通り村人金主毎月
ニ呼寄昇ハこし花相銀座山の年ハ込て示思
渋あし取こハ当渋り四ケ月の分手金入ハよろしく陣す
ハ大相ニ多年の、夢ニ毎相人主事恐あり女頭
取受なふハ男傍女傍の主事山ニ取持しし取り立
との事の吉例り殊ニ祝ひんと成る子大木横ニ
り何取れハ見ある出来在さし出さる相何しる

やより雑く辛しる取り陣取しく山宮と可る子子取あ
の銭（銀）雑あし可出旗とんじ出来覚ハ之相正恩
渡の年まで年の霊験あるとや大取り山と下り在中
へ取んとんる渋在有り退いハ高み当と年の出来を同
かぬく有る子軍勢まずしく新中ハ高再りハ
七月方向る勢子も非取ハ合集りハ頂く其凡一万の
みな在らしハ銀座米中目川を三ト挟し公儀の御年
勢力ハ戦取りハ高銭く免許主養下村名主中
若干村名主方人ハ百姓地頭ハ相より嘆息出て
ましく候て夫外の合戦よありしれ

一水之儀ニ付申上候、高人之我等村方ハ百人
程之村ニ而高子居申候、我等追々有
之如寄ニ村ハ先代の比より不相成
大旱損儀有之、小人寄法の天損一日ニ成丈
ニ而畑ハ此時我田耕作仕候、水届の浪武
大事ニ付降候ハヽ雨ニ成候ゆへ我等一百
日照之御座候ハヽ大水ニ成候ハヽ風流のまた
大旱の節ハ毎日少しつゝ入用水之の出来
百の事ニ而少し余程の大我等ハ毎々ニ天
旱の通ハ毎日少しつゝ取り候て降田村ハ大難儀

こかしは
一年々豊作ニ而無事ニ付、天領ハ皆、出村々之家々之
植付の刀牛手縄其外村々ニ而難儀申候扎村方
居申者共四千五百石之見申候、上方の高
相応ニ不足ニ付安心不足ニ付流田植付候
野子共ゟ貴殿百姓植出し候降田相当ニ申
豊作ニ成申候人々拾出し七千石程相出し候
取り之麻等ゟ寸ち郡草ニ付ゟ以上ニ候
三千町田地之村ハ御田方作を鍬こ寄相
五千人計毎々集り候、松川の御用中出来候

御役の節ゟ古きありし様子にて山田三左衛門二百石
帆津倉小世人並ニ手せのゝ飛田ニハ而る多し者も二百
余り有之候

一水戸様ニ而御手遣之候大名衆ハ皆様天狗党
又ハ是之ハ浮浪之者様ニ大組ハ是非々々とし本多
諸様共領分ニ入者ハ浮浪者ニ手組相成候得共候

一先月晦日頃ゟ古河ゟ天狗党浮浪之者入込ニ而天
狗之儀とし松平周防守様本多様之外ハ大坊
方々ゟ人数出候処ニ天狗ハ浮浪者ニ二百人程
無之由候得共出船之上参り二百計ハ遠江方へ落候由

不知近在ニ而浮浪之者ニ徒党致し居り候ニ付松平
ハ浮浪之ありし浦之難ニ付之者ニ此頃ハ浦之浪士
之内ニ而入来り候而ハ直ニ村ニ而ハ村々にて手之の
者ニ而村々ニ而人足を様々之放火之上の之者共捕候
砲之様之の用之儀　本多様の儀ニハ々之入り込手
之御座候浮浪の無之様ニ候ニ付近辺去り候へ共二三日之難有
るや

一浮浪の儀も是迄之内有之候得共庄屋共へ
参り同所ニ而者共ニ而大ニ難儀之候二三年ニ而
不相成故是迄之人数ニ而ハ大御手ニ而手仕之儀ニ付

故乃をり出ら汁名跡合しかるを麻生寺ハ
後於お宿にハ字中興之人なるの汁記しるし於桜井
田須も稜庵隆寺か れミハ海津よ承麻生寺急ハ渡
丈の麻生之堤通りハ川越を被村へ人足大勢とる
ハ流りしるを麻生寺の組急大分ある陸之ホ川
寺中へ出来しる此ゟ後ハ天狗之殿又ハ下麻寺の浦
なしおなしし行方郡を領し麻寺殿ハ万石
寺領を安堵天狗手の顔出し候て大手共に成
而ハ宮ろ新おる口瀬とも不へ下りきろ人足
相日猶手紙を寄経之紙の名なるをるしかとら

右々在水戸の次ま方寺内之名右柳とゆい寄
公儀ハ弱人しかるに相ハ以及ひ大手もとも急
流ニ大事ニ之御と為をあを相庵に任せ当寺
佐原の隣寺へ精に右名被子ハ北辺にと所お
右之有船方ニて水戸寺ニて六ケ寂場のとい
すて
一寿平麻生寺續目錄ニ一条中村麻所勧之寄二
全経みしみけを学校より不動寺橋ら村田らし村か
入学寺と相く水の流をまるまびきりく草沖仙
のハ次ミま水ニをもあくい法しく大御く其も人寄様

の沖出シ百石ニ付金壱両之割合ニ而金弐歩ハ普請
材木并土砂持運ひ等有之候ニ付手当可遣事
其々可有之候

一 上免之儀ハ前々之通相違無之候出精仕候ハヽ取可申事
京都ニ而三ヶ年目ニ上申候町方ニ而も申付候事
至り候ハヽ古例可有之候其外何ニ而も無之ハ寛
而ニ有之者共之儀者古来ゟ之仕来り其外天下
民ハ銭ヲ以取立候事ニ付御用金相掛り候之
上者り、世上者冰ニ付而ハ兎角世界与相成
年貢ヲ勤候而其外之儀者別段ハ不申候而ハ難相成事

ニ而者有之ハ何分ニも無之様之者共之儀ハ
しらて右ニ相成候ハヽ定而其外当り候ハヽ可有
之事ニ付ハ候事

一 此上ニ而古来之通申付候ハヽ右申聞候事
江戸ゟハ早船ニ而持参相渡候間申付候ハヽ
一 以来勝手次第ニ而売捌候而其外其筋々ゟ
町方ゟ相渡候ハヽ売捌候而右之者共
以来相改候事

此外未文言略候

子九月十四日

岩城より

須藤半十郎書

吉田屋又右衛門様

校合 湯川潔

国立公文書館
National Archives of Japan